

2019年10月22日（火）

第57回全国知的障害福祉関係職員研究大会
第4分科会

「障がいのある人の居場所をつくる」
～生きがい・やりがい・支えあいをつくるために～

東洋大学社会学部 高山直樹

カレル・ヴァン・ウォルフレン著、篠原勝訳

『人間を幸福にしない日本というシステム』毎日新聞社、1994年、25～26頁

『日本の市民はたいいてい、何かにつけ、このリアリティにはまり込んで動けなくなっていると感じている。表向きのリアリティが、管理されたつくりものに過ぎない、と時々気づくが、結局はそれを受け入れざるをえない。なぜなら、周りの世界はすべてそれによって動いているからだ。日本人がこうした状況にはまりこんだ時、口をついて出るセリフが「シカタガナイ」である。「シカタガナイ」というのは、ある政治的主張の表明だ。おそらくほとんどの日本の人はこんなふう考えたことはないだろう。しかし、この言葉の使われ方には、確かに重大な政治的意味がある。シカタガナイと言うたびに、あなたは、あなたが口にしていてる変革の試みは何であれすべて失敗に終わる、と言っている。つまりあなたは、変革をもたらそうとする試みはいっさい実を結ばないと考えたほうがいと、他人に勧めている。「この状況は正しくない、しかし受け入れざるをえない」と思うたびに「シカタガナイ」と言う人は、政治的な無力感を社会に広めていることになる』 ⇒ 『そうはいっても』

「シカタガナイ（仕方がない）」

- マンパワーが足りないから
- 社会資源が足りないから
- 障がいが重いから
- 老朽化しているから
- 法律や制度で決まっているから

人が集まらない

利用者の力を奪う
職員の喜びを奪う
組織の改革を奪う

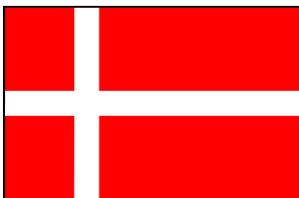
虐待

事故

ノーマライゼーション理念の発端

1951年にデンマークで結成された知的障害者「親の会」の運動

- **デンマークにおける知的障害者の処遇は1855年に始められ、さまざまな変遷をたどるが、戦後になっての知的障害者への処遇は、隔離的・保護主義の強いものであった。**
- **1950年代当時の知的障害者施設の状況**
 - **隔離・保護・管理中心**
 - **1500床以上にもなる巨大施設が存在**
 - **知的障害児者を大勢詰め込む**
 - **優生手術を無差別に実施する等の非人間的処遇**



ノーマライゼーション (Normalization)



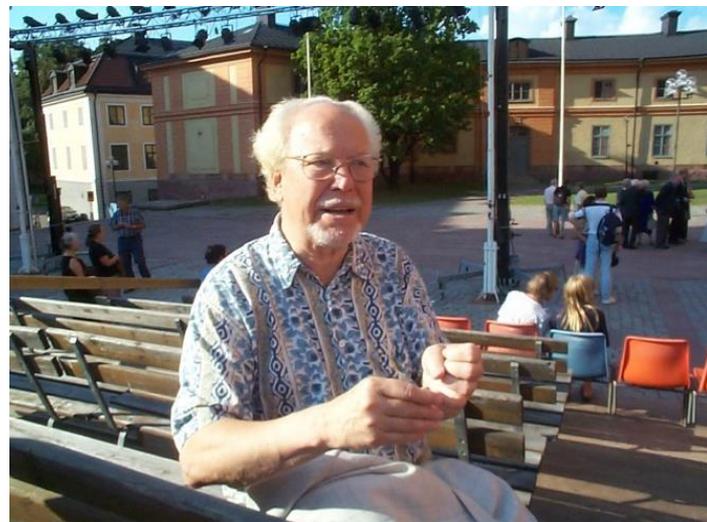
- 「1959年法」(デンマーク)に規定されているように、「知的障害者のために可能な限り、ノーマルな生活状態に近い生活を創造する」という精神が基調。
- **N.E.バンク-ミケルセン**は、「ノーマライゼーションとは基本的には種々のドグマ、特に何世紀もの間、知的障害の人々を困らせてきた保護主義に対する攻撃であった」と主張。彼はナチスの収容所での体験と入所施設が同様のものであることに言及。
- **B.ニイリエ**「知的障害者の日常生活の様式や条件を社会の主流にある人々の標準や様式に可能な限り近づけること」と定義した。その具体的な目標である、**ノーマライゼーションの8つの原理**を提示し、障害者の権利として保障される必要があることを強調。

B. ニィリエ（ノーマライゼーションの8つの原理）

「日本の知的障害者施設は、スウェーデンの30年前の精神病院よりひどい、利用者が〇〇〇〇できない構造だ（1997）」

- 1日のノーマルなリズム
- 1週間のノーマルなリズム
- 1年間のノーマルなリズム
- ライフサイクルでのノーマルな水準
- **ノーマルな要求の尊重（自己決定）**
- 異性との生活
- ノーマルな経済的水準
- ノーマルな環境水準

（ベンクト・ニィリエ氏
スウェーデン・ウプサラ 2001）



障害者の権利に関する条約 (2014年2月19日効力)

第17条：「全ての障害者は、他の者との平等を基礎として、
その心身がそのままの状態¹で尊重される権利を有する。」
(integrity = 不可侵性)



人としてあたり前の生活の保障



「私たちのことを私たちぬきで決めないで！」
(Nothing about us, without us!)

意思決定 (支援) ・ 人生の主人公

医学モデルから社会モデルへ

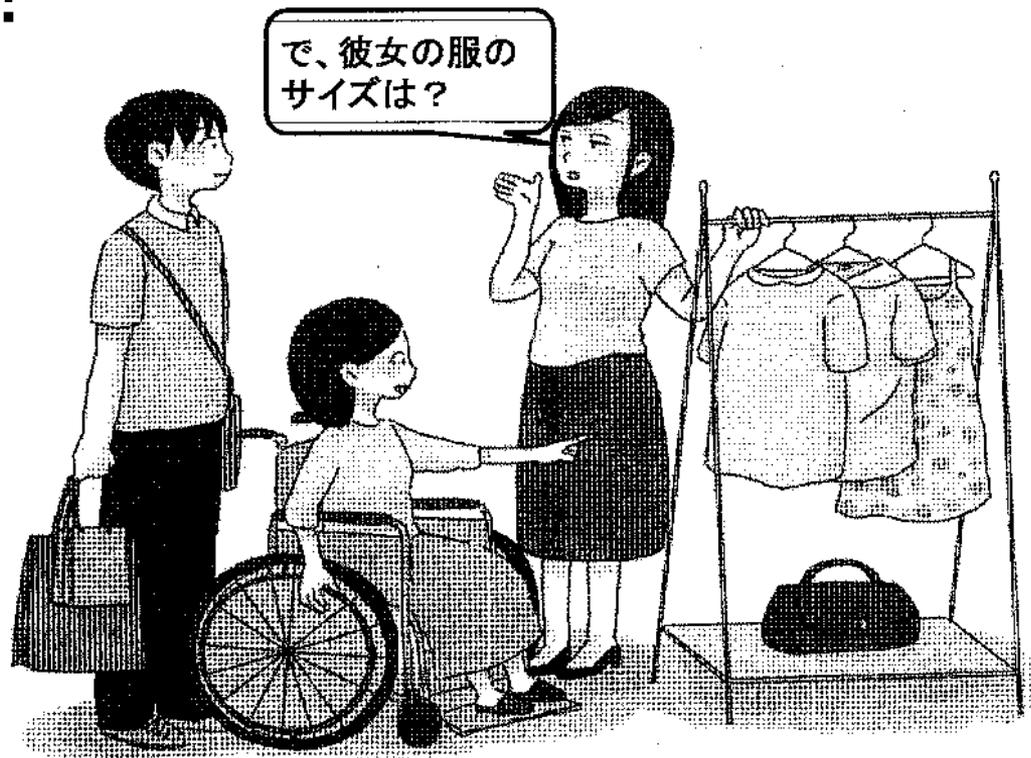
- 「医学モデル」：障がいのある人が、困難に直面するのは「その人に障がいがあるから」であり、克服するのはその人や家族の責任だとする考え方 → 訓練・指導・教育

それに対して

- 「社会モデル」：「社会の側が『障がい（障壁）』をつくっており、それを取り除くのは社会の責務だ」とする考え方
→ バリアフリー・環境調整

◇社会モデルとは？

何か問題は
ありますか？



意思決定支援を構成する要素

- 意思決定の前提となる**環境要因**へのアプローチ
- 実際に意思決定を行う際の支援方法
 - ①わかりやすい情報提供
 - ②**意思表出支援（安心、自由、解放、正直、誠実）**
 - ③チームアプローチ
 - ④何でも言える信頼関係、失敗できる**環境設定**といった配慮面
 - ⑤結果のフィードバックによって、**成功体験**（表出した意思がわかってもらえた、その通りになった）や**失敗体験**（思い通りにはならなかったけど自分で決めた）の積み重ねが必要

意思表出支援・環境づくり

意思表出支援

- 「**弱い紐帯**」の強み：マーク・グラノヴェッターが発表した仮説であり、新規性の高い情報は、自分の家族や親友、職場の仲間といった社会的つながりが強い人々（**強い紐帯**）よりも、知り合いの知り合い、ちょっとした知り合いなど社会的つながりが弱い人々（**弱い紐帯**）からもたらされる可能性が高い。
- 強い紐帯：家族・職員・教員・行政などの専門職
- 弱い紐帯：友人・ボランティア・活動（音楽・スポーツ・芸術）

強い紐帯の関係性では、自立は危うく、意思表出が限定的となる。弱い紐帯が意思表出を促進し、強い紐帯にも影響を与える

マージナル、マージナルマン

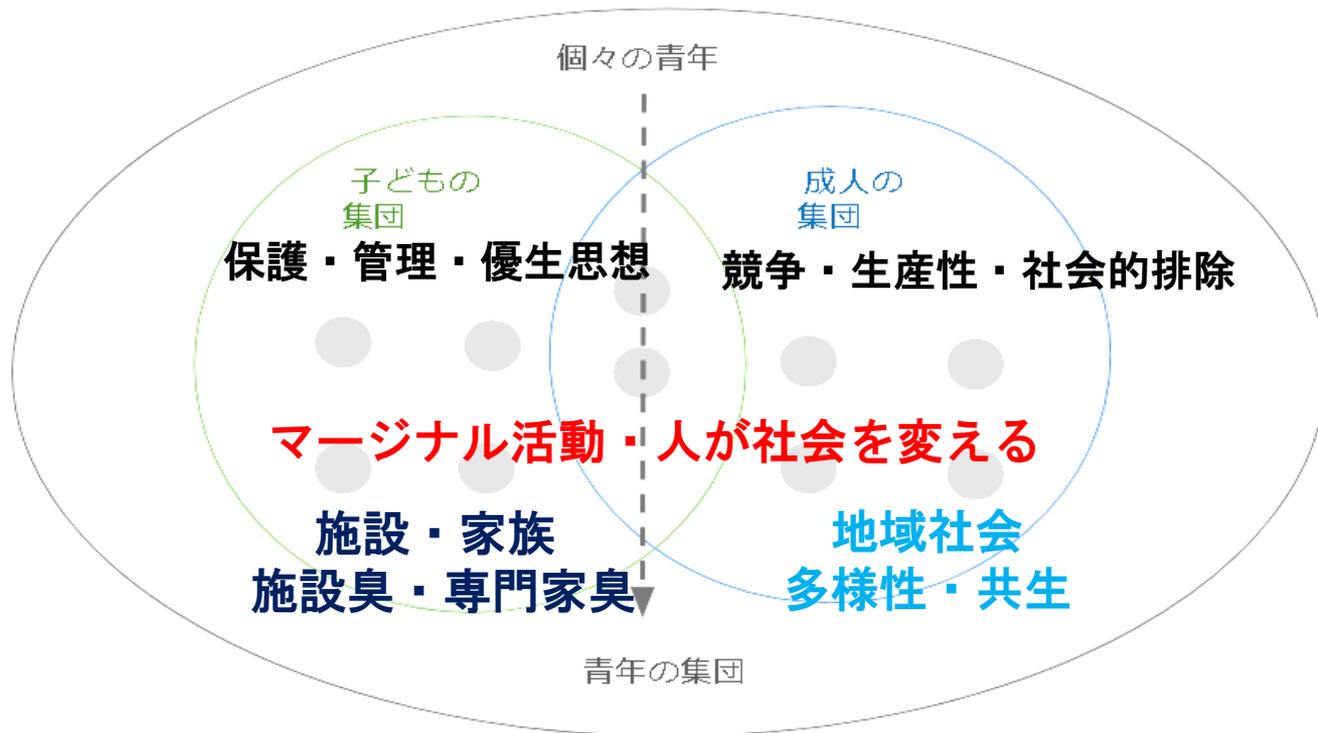
- 文化を異にする複数の集団（又は社会）に属し、その異質な二つ以上の文化と集団生活の影響を同時的に受けながら、そのいずれにも完全には所属しきれない者。
- 施設、グループホームと地域社会、特別支援学校と地域社会、放課後デイサービスと地域社会
- 各集団、各文化のいわば**境界**に位置している人間。**境界人**などとも訳す。新しい国に移住したばかりの移民、農村から大都市に出てきたばかりの者、偏見や排斥の的となっている少数民族の出身者、混血児、改宗者などにこうした型の個人が生まれやすい。

マージナルの積極的意味

参考:『K・レビン著、末永俊郎訳『社会的葛藤の解決』(1954・東京創元社)』

- 境界的な生活体験が、既存の文化では、まれにくい独自のものの見方、価値観、感受性をはぐくみ、優れて創造的な意義をもつことがある。事実、多くの芸術家、思想家、学者などがマージナル・マン的境遇から輩出している。
- 現代社会では、個人の永続的に所属する共同体が弱まり、人々は生活史上さまざまな集団生活を経過し、その欲求充足のため**多様な集団に同時に関係をもつ**ようになっているため、一般人でもマージナル・マンのそれに近い心理を味わう機会は増えている。

レヴィン (K. Lewin, 1890 ~ 1947): 青年期が児童期と成人期との
あいだの時期、青年が子どもの集団にも属し、大人の集
団にも属さない中間の存在であることから境界人と呼んだ。



大切なのは利用者の居場所づくり

- 物理的居場所（安心・安定・安全）
- 関係的居場所（対等・承認・つながり）
- 存在有為的居場所（影響・主体・役割）
- ○○○○的居場所（自由・楽しい・行きたくなる）



共生→共に生きる→○に生きる→○に生きる

誰かの何かの 役に立っていると感じられること

- 自分がこの場所に必要とされていて、自分がこの場を構成していると感じられると、「ここにいていい」という安心感が生まれる。
- 自分ができることを差し出す=Giveする、できることを出すのが先で、出すとそこに自分と誰かの居場所ができる。居場所ができると、人が集まって、そこでつながり、お金（経済）が生まれる。

ありのまま＝自然にいられる場所

- 「居場所」のもうひとつの要素は「ありのままにいられる場所」
- 成果を出しているときだけ自分を受け止めてくれるような「条件付き」の場所はたくさんある。そうではなくて、どんなに社会的にダメであっても、そんな自分を受け止めてくれるのが「居場所」

パーソンセンタードネス入門（シドニー大学障害学センター）

監訳：東洋大学福祉社会開発研究センター障がいユニット

- パーソンセンタードネス（本人中心主義）とは、一人ひとりの価値を認め、どの人にも尊敬と尊厳を示すこと
- 支援者は、本人の声を深く傾聴し、共感することを通じて、他者との関係を深める
- すべての人が良い人生を送れるように努める
- 常に本人を真ん中において、本人の力、強み、可能性を信じ、その力を引き出す
- **障がいのある人の意思決定、自己実現の支援は、支援者の仕事を通して支援者自らの自己実現と重なる**